

「笑い」に関するオノマトペの日中対照研究

夏逸慧(東北大学)

1. 研究背景と課題

日本語のオノマトペは多種多様であり、①慣習的なオノマトペと、②臨時的なオノマトペの二種類に分類できる(小林 1935, 1965, Hamano 1986, 1998)。臨時のオノマトペはマンガでたくさん用いられ、語基にQ(促音)・N(鼻音)・R(母音の長音化)・リ・反復という「オノマトペ標識」を加える派生形は、生き生きとした描写力を持っていると考えられる(田守, 1993; 2002)。例えば、マンガから取り上げた「ゲシシ」や「ドヒャヒャ」などは、作家の想像力を働かせて独自に作った創造的な「笑い」に関するオノマトペである。

「笑い」は、『広辞苑 第六版』(2008: 3036)の定義を要約すると「内部の肯定的、否定的な感情を主に顔の表情などで外部に表す行為である」とされている。「笑い」に関するオノマトペの音象徴性について、角岡(2006)は「ハ行」の5音を例として「ハ」は豪快な笑い、「ヒ」は隠微な笑い、「フ」は含み笑いのように独善的、「ヘ・ホ」は「下品さ・上品さ」といった共通のイメージがあると指摘している。では、中国語にはどのような音韻的な特徴があるのだろうか。

本研究は「笑い」に関するオノマトペが顕著に用いられる藤子・F・不二雄『ドラえもん』(1~44巻)に着目し、日本語のマンガ(249例)とその中国語版(245例)の「笑い」に関するオノマトペを研究の対象とした。マンガを対象としたのは、オノマトペの表現が豊富であることと、日本語のマンガを通して中国語話者がオノマトペをどのように習得できるかは日本語教育において興味深い問題だと考えたからである。次の課題を設定した。

- ①「笑い」に関するオノマトペの形態的な特徴を考察し、マンガにおける臨時的なオノマトペの創造力を明らかにする。
- ②日本語が中国語に訳される時、その対応関係や子音・母音に関する音韻的特徴も含めて検討する。

2. データと分析方法

2.1 対象としたオノマトペ

漫画『ドラえもん』は「中国人に影響を与えた日本のアニメTOP10」¹の一位として、中国人にとって忘れられない漫画となった。特に、このマンガでは笑い声やその表情を描写するときにオノマトペが多く用いられる。これらの理由から、藤子・F・不二雄『ドラえもん』1~44巻(日中両語版)を分析対象とし、笑いのオノマトペを収集し、統計分析した。日本語版マンガには249例が使われ、中国語版には245例がある。日本語版に現れた感嘆詞「ねえ」、「ほう」、「へえ」などが中国語に訳される際に、笑いの擬声語「哈哈」が使われる場合があり、また、中国語版には、日本語のオノマトペを翻訳せずに省略する場合もあるため、両国語のオノマトペの数は一致しないことが見られる。

2.2 オノマトペのパターン分類

日本語のオノマトペは基本的に1音節CVタイプと2音節CVCVタイプの語根から形成されるという先行研究に基づいて、先に『ドラえもん』から取り上げた笑いのオノマトペを一音節CVタイプ(日本語196例、中国語244例)と二音節CVCVタイプ(日本語53例、中国語1例)に分類した。次に、母音(中国語は韻母)ごとに頻度を取り、語基の子音など音韻要素によってそれぞれに差がみられるか調べる。また、臨時的なオノマトペの形態構造特徴を詳しく分析するために、促音・撥音・母音の長音化・「リ」という「オノマトペ標識」と接辞(語頭要素)によって語基から派生形に変化される過程について論じる。

¹中国版ツイッター・新浪微博(2017.11.8)

3. 「笑い」に関するオノマトペの日中対照分析

3.1 母音と子音の比較

まず語基1音節タイプの母音の使用状況について検討する(日本語196例, 中国語243例). 下の表は『ドラえもん』に掲載されている「笑い」に関するオノマトペを母音ごとに頻度を取り, (%)に表したものである².

表1. 日本語の母音使用頻度

a	i	u	e	o
59.18	8.67	13.77	13.27	5.11

表2. 中国語の母音使用頻度

a	i	u	ɤ	eɪ	oʊ	ɤŋ
60.08	16.46	2.05	2.05	16.05	1.65	1.65

表1と表2から明らかなように, 日本語も中国語も笑い声を記述しているオノマトペは母音aを持つ語彙だけで全体の半数以上を占めている. 日本語の場合, 二番目に多いのは母音[u] [e]で, 割合はほぼ同じ, [o]を持つ擬声語「ホホ」の頻度が少ないが, 「ムヒョヒョ」(1例)や「オホホ」(3例)など「ホホ」からの派生形が様々である. 中国語の場合には, 単母音[i]と二重母音[eɪ]の割合が近似し, 単母音[u]と二重母音[oʊ], 鼻音[ɤŋ]を持つ擬声語が少ない. 次に語基における子音の使用を探てみたい.

a. 日本語の1音節タイプ

ハ[ha], ヘ[he], ホ[ho], フ[ɸu], ヒ[çi], ヒヤ[çja], ヒョ[çjo], プ[pɯ]キ[ki], ク[kw], ケ[ke], シ[fi], シャ[fa]

b. 中国語の1音節タイプ

ハ[xa], 嘿[xeɪ], 呵[xɤ], 哼[xɤŋ], 吼[xou], 嘻[çi], 呜[u], 噗[pʰu], 咯[kʰa]

c. 日本語の2音節タイプ

ニタ[nita], ニコ[niko], ニヤ[nija], ゲラ[gera], アハ[aha], カラ[kara], ヘラ[hera]

ウヒ[wçi], フヒ[ɸwçi], ヒク[çikw], ヒイ[çii], ウヒヤ[wçja], ギヤヒ[çi], ウギヤ[wgja]

プヒヤ[pwçja], キヒヤ[kiçja]

d. 中国語の2音節タイプ

哈呀[xaja]

語基の音節として, 中島(2006)でも分析された「H系列(ハ行), K系列(カ行), N系列(にこ, など)」も含めて, 摩擦音[h] [ɸ] [ç] [ɸ] 破裂音[k] [p]から成る一音節タイプのオノマトペは登場人物の笑い声を描写し, 語頭「ニ」で始まる2音節語基が笑いの表情や顔を表す擬態語であるが, 語頭で摩擦音[ç] [h] 破裂音[g] [k] [p]を持つ2音節タイプは全て笑い声を表現する. 一方, 中国語においては, 摩擦音[x] [ɤ], 破裂音[pʰ] [kʰ]を持つ一音節語基を反復して派生した形であり, 2音節の語基として哈呀[xaja]というように一例しかない. 即ち, マンガから取り上げた「笑い」に関するオノマトペは, 日本語も中国語も摩擦音と破裂音を持つ音節要素が使われている.

また, 母音の音象徴性について, 例えば, ハハ[ha]は「哈哈[xa]に訳され, 母音[i]を持つ「ヒヒ・シシ」は常に嘻嘻[çi]が多く用いられる. 後者は, 口を手で押えて笑表情を遮っているながら笑い声が喉から漏れる様子がうかがえる. マイナスなイメージがある[e]音と組み合わせた「へへ」は嘿嘿[xeɪ]または呵呵[xɤ]に訳される場合が多い. また笑いを我慢できない時, 思わず吹き出してしまう「プーッ」は中国語にも噗[pʰu]のように一吹きして笑うことを工夫して表した. 以上のように, 日本語も中国語も発音が近似しているオノマトペが多く, 音韻的な特徴も似ていることが分かった.

²李(1987)によると, 漢語の音節は「声母」, 「韻母」, 「音調」から構成されていて, 前半の成分を声母といい, 後半の成分を韻母という. 声母という成分で使用される音声素材は「ゼロ声母」を除けば, 全てが子音であり, 韻母という成分で使用される音声素材には母音もあり子音もあると指摘される.

3.2 語頭要素の比較

(1) 日本語の語頭要素

- i 「ア, ガ, ワ, プ, ゲ, キヤ, ギヤ」+「ハハ」, 「イ, ウ, ム」+「ヒヒ」, 「ウ, ゲ」+「フフ」,
「ウ, テ, エ, フ, グ」+「ヘヘ」, 「オ」+「ホホ」, 「ウ」+「キキ」, 「ゲ, ギ」+「シシ」
- ii 「ウ, ブ, ド」+「ヒャヒャ」, 「ウ」+「シャシャ」, 「ム」+「ヒョヒョ」
- iii 「エ」+「ヘラ」

(2) 中国語の語頭要素

- i 啊哈哈[axaxa], 哇哈哈[waxaxa], 呀哈哈[jaxaxa], 呜嘻嘻[uciei]

日本語における「笑い」に関するオノマトペの語頭要素は母音(または母音に類する音)³だけでなく, 様々な語頭要素が共起する例が実に多いこと. 例えば, [w]音を持つ音節は語頭要素としてよく使われて, 「ウ, ム, ク」のような語頭要素と語基の組み合わせは, 調音のし易さという発音の利便性から来していると考えられる. また, 語頭要素として無声音—有声音のペアが多く見られる. 例えば「k—g」, 「h—b—p」などの清濁音を持つ語頭要素の音象徴性からみると, 「ガハハ」, 「ギヤハハ」のような濁音を持つ語頭のオノマトペは「力強い, 粗い」というイメージを伝える.

それに対して, 日本語の「アハハ」, 「ワハハ」など発音が似ている「啊哈哈/axaxa」, 「哇哈哈/waxaxa」は「哈哈/xaxa」に基にした派生された擬声語であり, またウシシ[wɕiɕi]の発音が近似している呜嘻嘻[uciei]は語頭要素の種類がまだ少なく, お互いに類似性は明らかである.

3.3 日本語の臨時的な形態構造形

- ①促音・撥音形: i 語中+「ッ」, 「ヒッヒヒ」, 「ワッハッハ」
ii 語尾: 語基反復+「ン/ッ」, 「ヒヒヒン」, 「エヘヘッ」, 「ニコニコッ」
- ②母音延長化・「リ」: 「ホホウ, ハハア, ヘエエ, ハアア」, 「ニコリ, ニヤリ, カラリ」
- ④語基反復+長音化+「ッ」: 「ニーッ」, 「ゲーッ」, 「ウーッハッハ」
- ⑤語基の組み合わせ: 「アアハッハッハ」, 「ウヒャハハハ」, 「ウヒョホホホ」, 「ウギヤハハ」

マンガで最も用いられていたのは語基が何度も反復された形で, 例えば, 「アハハハハハハハハハ」のように10回と繰り返される形すら登場するのである. ①のように反復形または不規則反復形の語中と語尾に促音や撥音などが付加されるオノマトペがあり, 「ワッハッハ」のように全ての音節の間に促音を伴った形態が多数見られた. 次に, ②において, オノマトペ標識「リ」は「ニコ」, 「カラ」のような2音節CVCVタイプに後接する際の接辞形である. それに対して, 母音の長音化は一音節CVタイプの臨時的な変化であり, 母音の長音化により一音節3モーラ音形である. また, ④で観察されるように, 複数の「オノマトペ標識」RQを加える派生形が多い. 例えば, 「ゲーッ」のような「長音化+促音」という組み合わせも見られた. これは促音の音象徴面よりも, 笑い声を忠実に表記に再現したという側面で捉えるのが的確であろう.

さらに, 田守(2002)の臨時的オノマトペの創作方法も適用して, 「アアハッハッハ」のような臨時のオノマトペは慣習的なオノマトペ「ハハ」とそれに近いオノマトペ「アア」のように「一音節タイプ+一音節タイプ」の組み合わせであるとした. また, 「ウヒャハハハ」のように「二音節タイプ+一音節タイプ」という臨時的な音韻形態は「アハハ」や「ウヒャヒャ」などと異なる特殊な形態である.

³角岡(2007)によると, 語頭要素とは, 笑声などの擬声語において「語幹の発声を導く」という機能を果し, 「語基反復の部分的先行」とでも分類すべき性質のものであり, 主として笑い声に現れる母音(また母音に類する音)であり, 意味的な性格を持たず, 接続する笑い声の発生を容易にするという音声的側面のみであるという特徴が観察される.

3.4 日中両国語版の対応関係と翻訳難点

中国語「ドラえもん」には、笑い声を描写することより、登場人物の心理状態を表現する中国語オノマトペ、通常「哈哈/xaxa」,「嘿嘿/ xēixēi」,「嘻嘻/cici」という三種類が多く見出される。翻訳方法として、日本語に固有なオノマトペを伝えたい感情を具体的に説明する以外に、原文と中国語の間には内容上の違いがほとんどないのである。例えば、[o]音を持つ「ホホホ」は女性の笑い声としてよく使われているが、中国語には[o]音を持つオノマトペがないため、「哈哈/xaxa」,「嘿嘿/ xēixēi」に訳される場合が多く、含み笑いを描写する「フフ」は「哼哼哼/xūxū xūxū」に訳される場合もある。両国語の発音が違うが、共通している笑いのオノマトペの性格を持っている。

一方で、日本語版には、慣習的な語基が硬口蓋化された「ヒャ、ヒョ、ギャ」など臨時的な音節の組み合わせ「ウヒャ、ギャヒ」という語根がよく使われ、中国語に訳される際に、翻訳しにくいところがみられる。例えば、図1には「ヒーヒー」,「ヒクヒク」は「嘻嘻/xī xī」に翻訳される。「ヒク」は「ヒヒ」のような笑いとし「クク」のような笑いを混せて表現している。「ヒヒ」は口があまり開かない状態であり、感情が細やかで微妙なニュアンスを伝えて、自分の感情を抑えながら笑っている。「クク」はもっと目立ち、少しだけ唇を突き出して短く笑う声であり、逆に人の注意を引きつける効果がある。他の例として「ウヒ」,「フヒ」,「ギャヒ」,「ウヒャ」など音節「ヒ」を含む語根から派生される臨時的な二音節オノマトペが様々な感情と一緒に出しているが、中国語版にはこのような複雑な心の状態が感じられないといえる。勝手に「哈/hā」,「嘿/hēi」,「嘻/xī」を組み合わせれば、笑いのオノマトペではないという状況になると思われる。



図1.藤子・F・不二雄『ドラえもん』25巻38ページ(日中両語版)

これらの事例により、中国語より日本語のオノマトペが多様化であり、生活では誇張された表現が見いだされるようになった。翻訳の不足点について、中国語は単一の語基を使用して派生の難しさが見られるが、他の語彙に笑いの意味を付与されているので、新しい笑いのオノマトペを使って翻訳すれば、日本語の細かい感情と微妙なニュアンスを伝える可能性があると考えられる。

4. 結論

本研究では、日中両語における「笑い」に関するオノマトペ音節要素を分析して、両言語は発音が近似しているオノマトペが多く音韻的な特徴も似ているが、母音による具体的な感情表現にはニュアンスの違いがある。形態的な特徴からみると、日本語も中国語も二回以上繰り返される形が多く、マンガを通して様々な「笑い」に関するオノマトペを巧みに用いて、中国語話者が生き生きとしたオノマトペの魅力を感じる。日本語の語頭要素を持つ臨時オノマトペは、作家が独自に創造したものであり、語頭要素により微妙なニュアンスの違いがみられた。以上の研究成果は、日本語学習者に笑いに関するオノマトペをよりよく理解させられることが期待され、日中両語のオノマトペ研究の発展に資するものである。

参考文献

- 角岡賢一(2007). 日本語オノマトペ語彙における形態的・音韻的体系性について くろしお出版
田守育啓(2002). オノマトペ擬音・擬態語をたのしむ 岩波書店
Shoko Hamano. (1998). The Sound Symbolic System of Japanese. Stanford: CSLI
李思敬著・慶谷寿信、佐藤進編訳(1987). 音韻のはなしー中国音韻学の基本知識ー光生館